

「小さな奇跡」は生き続ける 第 29 回夏のインターウニ・ゼミナールを終えて

境 一三 (慶應義塾大学)

DAAD 友の会の皆さんには、「インターウニ」という名前は何らかの形で知られているだろう。正式にはドイツ語で Interuniversitäres Seminar für deutsche und japanische Kultur、日本語で「ドイツ語・ドイツ文化ゼミナール」と呼ばれ、年に 2 回、春夏に開催されている。

3 月には 30 余の大学から 100 人の学部学生と 20 人の教員、それにドイツ人学生ゲストなどが福島県新甲子にある獨協大学の研修所に集まり、ドイツ語を「使いつつ」学ぶ。7 月には、長野県野尻湖畔で 25 名を定員として 3 年生以上大学院生が集い、あるテーマについて「ドイツ語で議論する」ことを学ぶ。

紆余曲折はあったが、今年ですでに、春は 26 回、夏は 29 回を数えた。第 2 回目以降、四半世紀にわたってオーガナイズをされてきたのは、東京大学名誉教授 (現聖徳大学) 吉島茂氏である。その吉島さんが東大の定年を期に実行委員会から離れられ、後を私も含めた後輩が次いだ。現在では、相澤啓一氏 (筑波大学)、星井牧子氏 (早稲田大学)、浜崎桂子氏 (神戸外国語大学) が実行委員会の中核として活躍している。

さて、表題の「小さな奇跡」だが、これは相澤さんと星井さんが 2006 年 11 月、DAAD の *Letter* に寄稿した“Das Interuni-Seminar Ein kleines Wunder in Japan”から引用した。1991 年の大学設置基準の大綱化以降、大学の第 2 外国語離れが進み、その中でももっとも尾羽打ち枯らしたドイツ語が、どっこいここでは生きている、これはちょっとした「奇跡」ではないかと私も思うからである。

多くの学生と教員が、休暇中にも拘わらずまったくの自由意志で集まり、5 日間ドイツ語漬けになってさまざまなテーマについて語り合うのだ。そこには大学の垣根はなく (interuniversitär)、学問領域の境界も軽々と乗り越えられる (interdisziplinär)。語り合うテーマは日独の文化・社会にとどまらず、東アジアの問題にも広がる (interkulturell)。そして、そこでは教員もまた学ぶものとして参加し互いに学び合う (Inter-Lernen)。ヨーロッパ中世の大学 *universitas* がもともと真理を目指して学び合うものの人的結合体 (組合) であったことを考えれば、教員・学生の垣根を越えたこの組織は、今流の *universitas* と言えるのではないだろうか。大学が「学校化」し教員もサラリーマン化するこのご時世に、こうしたありかたそのものが「奇跡」に近いと言えるだろう。

さて、今年 7 月 28 日から 8 月 1 日に行われた第 29 回ゼミナールのテーマは「対外文化政策」だった。日独で対外文化政策の最前線に立ついくつかの組織も当然議論の対象となった。インターウニが長年援助をいただいている DAAD からは Anne Gellert さんが、Goethe-Institut からは Rainer Buhtz さんが参加され、それぞれの組織の歴史や役割について講演をしてくださった。カウンターパートとして、日本側からは国際交流基金の河野明子さんが日本の文化外交について話してくださった。いずれも通り一遍の「外交的」講演でなく、それぞれの人が見える熱のこもったものだった。お三方とも Gruppenarbeit にも加わり、一緒に議論をしてくれた。特に河野さんは、ご自身の講演のためには一日の滞在で済むところを、休暇を取って全期間参加してくださった。彼女の存在がゼミ全体に与えた影響は大きい。こんな奇人な人を得ることができたのも、「奇跡」ではないか。

圧巻はソウルの誠信女子大学教授金韓蘭 (キム・ハラン) 先生の講演だった。インターウニでは Goethe-Institut の援助で、春にはすでに二回、韓国から教員 1 名と学

生2名をお招きしていたが、今回夏のゼミでも初めて教員と学生を招待することができた。対外文化政策の一つとして「植民地の言語政策」をサブテーマの一つに決めたわれわれとしては、当時の日本政府の言語政策が韓国側からどう見えたか、また戦後の韓国人がそれどう見ているかを聞きたいと思った。むろん日韓の間では議論が最も難しいテーマであることは承知していたが、金先生には無理をお願いした。案の定、先生からは長い間返事がなかった。困惑していたらしい。しかし、蓋を開けると、ご両親の経験されたことも含め、実にオープンにそして誠実に、この問題について語ってくださった。講演の中で、われわれ日本側が使うドイツ語のタームが、韓国側ではどのような心理的反応を引き起こすのかということまで指摘された。更には韓国で問題になっている事柄を漢字で表現するとこのようになる、と一覽表も見せてくれたが、これには学生からどよめきが起った。歴史問題を自分のものとして引き受けなくてはならないと、Betroffenheitを感じた瞬間であったのだろう。

日韓の間に横たわる、深く暗い溝は一朝一夕で埋まるものではない。しかし、このような問題を日韓独の、特に若い学生が寝食をともにしながら語ることは、日独文化を語ることと同様に、否、それ以上に重要なことだろう。そこで日韓どちらかの母語が作業言語になることは、歴史の澱ゆえに難しい。文化の根を失った「国際語」英語では、上っ面を撫でたようになるだろう。ここでドイツ語の出番となる。近隣諸国との歴史問題を抱え、それをいかに克服するかを考え実践してきたドイツ語であるからこそ、こうした問題に対する「ことば」(の力)を蓄積してきている。東アジアでドイツ語を学ぶ私たちが、最もその力を発揮することができるのが、実はこうした日韓、日中の問題なのではないかと実感したことであった。私にとっては予想を超えたこと、ちょっとした「奇跡」であったと言えるかも知れない。

DAAD 友の会 Echo 23 (2007年11月) 10 - 12 ページ。